

月の色は鉛色だった。これがほんものの月とは思えなかった。まるで粘土細工で作ったみたいだ、とアーウィンは思った。だが、さらに進むと、月の色は次々に変わっていった。鉛色をしているのは月の朝の部分だけだった。やがてそれは褐色になり、黄褐色になり、真昼の部分、つまり太陽光線を真上から受けている部分では、ほとんど白色に光って見えるのだった。そしてまた今度は逆に色調を落として夜の部分に入っていく。その中で、山や、海や、クレーターや、谷が驚くべく巨大なパノラマをくり広げていく。月は地球よりはるかに小さいのに、一つ一つの造作が大きいのである。クレーターの大きなものは、日本列島を横にまたぐくらい大きいし、富士山より大きな山はいくらかもある。グランドキャニオンより大きな谷もある。

そして、そこには生命のかけらも観察することができない。生命の色である青も緑もない。色は、前に述べた色だけである。何の動きもない。動くものが一切ないのだ。大気がないから風すらない。全くの無言、静謐である（音があっても宇宙船内から聞くことはできないに決まっているが、見ただけで無音であることがわかったという）。生命という観点からは全くの無である。完璧な不毛としかいいようがない。人を身ぶるいさせるほど荒涼索漠としている。しかし、それにもかかわらず、人を打ちのめすような荘厳さ、美しさがあった。アーウィンは、口もきけずにその光景に見入っていた。そし

て、ここには神がいると感じた。月の上に神がいるというのではない。ここには神がいると感じたのだ。自分のすぐそばに神の存在を感じたのである。正しく、手をのばせば神の顔に手をふれることができるだろうと思われるくらい近くにそれを感じたのだという。

「中略」

宇宙服を着たままで地球を見上げるといのは、なかなか容易じゃない。何かにつかまって倒れないようにしながら、できるかぎりそっくり返って上を見るとやっと地球が見える。それはちょうどこのマールブルクくらいの大きさだ」

「中略」

「それが暗黒の中天高く見える。美しく、暖かみをもって、生きた物体として見える。だが同時に、何ともデリケートで、もろく、はかなく、こわれやすく見える。空気がないせいか、その距離にもかかわらず、手をのばすとすぐさわれるくらいの近さを感じる。そして指先でちよつとつまんだら、こわれバラバラの破片になってしまうのではないかと思われくらい弱い。弱い。」

地球を離れて、はじめて丸ごとの地球を一つの球体として見たとき、それはバスケットボールくらいの大きさだった。それが離れるに従って、野球のボールくらいになり、ゴルフボールくらいになり、ついに月からはマールブルクの大きさになってしまった。はじめはその美しさ、生命感に目を奪われていたが、やがて、その弱々しさ、もろさを感じるようになる。感動する。宇宙の暗黒の中の小さな青い宝石。それが地球だ。地球の美しさは、そこに、そこだけに生命があることから

くるのだろうか。自分がここに生きている。はるかかなたに地球がポツンと生きている。他にはどこにも生命がない。自分の生命と地球の生命が細い一本の糸でつながれていて、それはいつ切れてしまふかしかない。どちらも弱い弱い存在だ。

かくも無力で弱い存在が宇宙の中で生きているということ。これこそ神の恩寵だということが何の説明もなしに実感できるのだ。神の恩寵なしには我々の存在そのものがありえないということが疑問の余地なくわかるのだ。宇宙飛行まで、私の信仰は人なみ程度の信仰だった。人なみ程度の信仰と同時に、人なみ程度の懷疑も持っていた。神の存在そのものを疑うこともしばしばあった。しかし、宇宙から地球を見ることを通して得られた洞察の前にはあらゆる懷疑が吹き飛んでしまった。神がそこにいますということが如実にわかるのだ。このような精神的内的変化が宇宙で自分に起きようとは夢にも思っていなかったので、正直いって、私は自分で驚いていた」

——あなたが、宇宙で神に出会った、月で神の臨在を感じたというのは、そういう直観的洞察を得たということをしてさしているのですか。稲妻に撃たれたように、一瞬のうちに神の恩寵の認識が得られたというような。

「いや、それはちがう。宇宙船の窓から小さくなっていく地球の姿を眺める。月から地球を見上げる。そして、宇宙と地球と自分を見くらべてそこに神の恩寵を感じ取る。そういう洞察と、月にいるときに得た神がそこにいるという実感とはまた別のものなのだ。その臨在感は、知的認識を媒介にしたものではない。もっと直接的な実感そのものなのだ。私がこ

こにいて、きみがそこにいる。そのときお互いに相手がそこにいるという感じを持つだろう。それと同じなんだ。わかるかな。すぐそこにいるから、語りかければ、すぐ答えてくれる。きみと私がこうして語り合えるように、神と語り合える。

人はみな神に祈る。さまざまのことを祈る。しかし、神に祈ったときに、神が直接的に答えてくれたという経験を持つ人がどれだけいるかね。いくら祈っても、神は無言だ。直接的には何も答えない。すぐには何も答えない。それが普通だ。神と人間の関係はそうしたものだとも思っていた。しかし、月ではちがった。祈りに神が直接的に即座に答えてくれるのだ。祈りというより、神に何か問いかける。するとすぐ答えが返ってくる。神の声が声として聞こえてくるというわけではないが、神がいま自分にこう語りかけているというのがある。それは何とも表現が難かしい。超能力者同士の会話というのとは、きつとこういうものだろうと思われるようなコミ ユニケーションなのだ。神の姿を見たわけではない。神の声を聞いたわけではない。しかし、私のそばに生きた神がいるのがわかる。そこにいる神と自分の間にほんとにパーソナルな関係が現に成りたち、現に語り合っているのだという実感がある。

これはどうしたって、すぐそこに神は実際にいるはずだ。姿が見えなければおかしいと思って、何度もふり返って見たくらいだ。しかし、その姿を見ることはできなかった。だがそれにもかかわらず、神が私のすぐ脇にいるというのは事実なのだ。私がどこにいても神は私のすぐ脇にいる。神は常に同時にどこにでもいる遍在者だということが、実感として

わかってくる。あまりにその存在感を身近に感じるので、つい人間のような姿形をした存在として身近にいるにちがいないと思ってしまうのだが、神は超自然的にあまねく滞在しているのだということが実感としてわかる」

——で、神はあなたに何を語りかけたのですか。

「私が求めるすべてに答えてくれた。月の上の活動は、すべてプログラムされていたとはいえ、無数の予期せぬシチュエーションに出会って、どうすればいいのか迷う場面が沢山あった。通信基地の装置を組み立てるときに、ヒモを引けばピンが外れる仕掛けになっていたのにそのヒモが切れてしまふとか、漏れないはずの水が漏れるとか、予期せぬ困難が次々に起こってくるヒューズに問い合わせて、答えを得るまで待っているのは時間がかかりすぎて間に合わないことがある。自分がとっさの判断を下さなければならぬ。どうすればいいのですかと神に問う。するとすぐに答えが返ってくる。誰か人間にたずねて答えてもらうのとはプロセスがちがう。全プロセスが一瞬なのだ。迷う、問う、答えるといったのは、説明のためであって、実際には一瞬なのだ。まるで自分でどうすればいいかがすべてわかっていたみたいだ。ジェネシス・ロツクの発見が神の啓示だといったのも同じ意味なのだ。探検家が苦労に苦労を重ねてついに発見したというのではない。我々はいささかも迷うことなくそこにまっすぐにいき、それを手に取った。まるでそこにそれがあるのを前から知っていたみたいだった。

神に祈っても直接の答えがない。仕方なく自分で判断を下す。あとからそれが最良の判断であったことを知る。そこで、

あのとき自分で下したと思った判断はほんとは神のお導きであったのだと結果的に思う。こういうことはよくあることだ。しかし、そうしたいわゆる神のお導きとは質的に全くちがうのだ。もっと直接的に神が導くのだ。自分と神との間の距離感が全くない導きなのだ。要するに啓示なのだ」

宇宙からの帰還 立花隆 中央公論社